

Prospective study of objective physical activity and quality of life in living donor liver transplant recipients

田中, さとみ

<https://hdl.handle.net/2324/4474967>

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (看護学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名：田中 さとみ

論 文 名：Prospective study of objective physical activity and quality of life in living donor liver transplant recipients
(生体肝移植患者の身体活動量と QOL に関する縦断的研究)

区 分：甲

論 文 内 容 の 要 旨

【目的】

肝移植後は、免疫抑制剤の副作用によりメタボリックシンドロームの発症リスクが高く、身体活動量の促進は、その予防に重要である。本研究の目的は、生体肝移植患者の術前と術後 3 か月、術後 6 か月の身体活動量と QOL について明らかにすること、術後 6 か月の身体活動量と QOL を対象群と比較すること、さらに身体活動量の変化を予測する術前の要因を探索することである。

【方法】

生体肝移植を受ける 20 歳以上の患者を対象とした。身体活動量は加速度計を使用して、1 日の平均歩数（歩/日）と 1 週間の中・高強度身体活動量（分/週）を測定した。QOL は自記式質問紙の日本語版 SF-8 を用いて、身体的サマリースコアと精神的サマリースコアを評価した。対照群は、肝移植患者と年齢（±3 歳）・性別を合わせた上で比較した。術前から術後 6 か月の身体活動量の変化を予測する要因は、一般化線形混合モデルを用いて分析した。

【結果】

24 名の患者が手術前後の調査を完了した。肝移植患者は 41.7%が男性であり、平均年齢は 55 歳であった。精神的サマリースコアは、術前から術後 3 か月で統計的に有意な改善を示し、身体的サマリースコア、歩数および中・高強度身体活動量は術後 6 か月に改善した。肝移植後 6 か月の患者の身体活動量は、対照群と比較すると有意に低かったが、QOL は肝移植後 6 か月で対照群と同等まで改善した。5 名の患者（20.8%）は肝移植後 6 か月までに対照群の歩数に到達し、2 名の患者（8.3%）は中・高強度身体活動量の国際推奨値に達していた。また、身体活動量の変化を予測する術前の要因は、年齢と骨格筋量であることが示された。

【結論】

肝移植後 6 か月までに、身体活動量と QOL は改善することが示された。本研究は、肝移植後の身体活動量の改善に焦点を当て、医療専門家による適切な術前介入の必要性を示唆している。